平成２８年度　第５回東部地区幼稚園教員・保育教諭・保育士等の合同研修会

「幼児期における特別支援教育の在り方
～気になる子どもの視点から保育を見直してみませんか～」

日時：平成２８年９月１５日（木）　場所：福祉人材研修センター

【研修講師】国立特別支援教育総合研究所
インクルーシブ教育システム推進センター　　統括研究員　　久保山　茂樹　氏

【ねらい】講義･演習を通して、インクルーシブ教育の考え方について学び、特別な支援が必要な子どもの視点から保育を見直すことで、明日からの保育の資質向上に資する。

【研修の様子】

1　共生社会に向けてみんなで「つながる」

保育者としての実践、保護者としての知恵や工夫を集めることが、子どもたちの生きやすさにつながる。保育者同士、保育者と保護者がつながることが大切。特別支援教育の視点は、幼児教育が行ってきた「一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導」そのものである。

支援される方も自分のできることをして、その支援を支えているんだね。

「共生社会」とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、**誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える**全員参加型の社会である。「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（平成24年7月　中央教育審議会初等中等教育分科会報告）

2　「子どもが困っている」を再考する

どうしてできないのかなあ。もう少し、がんばってみようよ。

いくらがんばっても、ほめてもらえない。うまくいかない。

自己肯定感

知らず知らずのうちに、子どものいまを否定していないだろうか？

子どもを見るまなざしが「評価のまなざし」になっていないか。

□できないことがその子のすべてとなっていないか。

□うまくいかない原因を子どもだけに求めていないか。

○**「気になること」に隠れてしまっている、その子の良さ、得意分野、役に立つこと、今持っている力でできることを見つけ、共に楽しむ！**

○ **まわりの大人が変わり、子どもとの関係を大切にする！子どもは、私たちがどう変わるべきかを教えてくれる。**

3　気になる子どもの視点から保育を見直す

「できるまでがんばりなさい」ではなく、「これならだいじょうぶ」な状態をつくる。

○**「○○できたのは、なぜだろう？」と発想を転換し、具体的な手立てを準備する。**

□できたのは、「○○かもしれない」と想像し、様々な援助を試してみる。

□音声だけでなく、視覚や動作など子どもとつながる方法を見つける。

○**基本の居場所はもちろん「クラス」。仲間との時間を大切にする。**

□落ち着く場所（例えば、○○先生の側）を認めながら、職員で連携してクラスの中に居場所をつくる。

音声だけでは、理解できないのかも。写真や絵を使ってみよう。

（こういう配慮があれば、）ぼくにもできる！

自己肯定感

子どもたちにとって、ゆるやかさは安心です。園の時間や空間の区切り、カリキュラムのゆるやかさを生かし、**「これならだいじょうぶ」を基本に、「これでもだいじょうぶ」の状態へ広げていきましょう。**

【参加者の感想】

○わらべ歌遊びを通して、支援される子どもも自分ができることをしていると感じた。特別支援教育は 、その子への配慮だけでなく、まわりの子どもを巻き込むことが大切だと感じた。まわりの子どもも保育者の関わり方を見ているということを忘れないようにしたい。

○「クラス」「集団」という意識が強すぎ、型にはめようとしていた自分に気づいた。そして、子どもを真正面からばかり見るのではなく、横に並んで、その子の目線の先にあるものを一緒に見ていきたい。ゆるやかさを意識し、柔軟な保育ができるようにしたいと感じた。

○「がんばれ、がんばれ」の連呼に子どもは戸惑っていると聞き、はっとした。また、混乱を招くようなあいまいな指示についても、見直したい。

○気になる子を思い浮かべながらお話を伺った。親の思いに寄り添ったり、まなざしを変えたりすることで、その子とのつながりが深まっていくのだと気づかされた。

子どもたちの笑顔が見られる保育をめざして･･･